320　中央大学運動会

〔『法学新報』第22巻11（259）号　大正元年12月1日〕

○中央大学運動会　去月九日午前八時より効(郊)外中野町に新設の中央大学運動場に於て学長奥田博士を会長とし秋季陸上運動会を開催したり時正に秋色漸く深く林樹の残葉は黄亦紅に嘗て植

付けられたる「ダリヤ」、「コスモス」等の草花も所所に点在して其名残りを示し満目蕭条況んや朝来の曇天冷気肌に迫るに拘はらす吾二千の健児は意気虹の如くイザと武者振して結束したる有様は観者をして却て快哉を叫はるるを得さらしむ錚錚たる振鈴は競技の開始を促し一発の銃声と共に三百ヤードの競争者か駆け出し次て第二回第三回と進み提灯競争、六百ヤード、下駄競争の滑稽なるあり第七回は載嚢スプーン、レースにして開場劈頭より発刊の「中央運動タイムス」は発刊の辞及運動会場の光景を掲載し又各競技了る毎に号外を発して其結果を報し加ふるに毎号の満画奇想百出せしか此載嚢スプーン、レースの状を写すに至りて最も其妙を極め喝采湧くか如く第八回は障碍物競争にして満場拍手を以て迎へしか遂に一等木村二等明石三等大庭の三氏の優勝に帰し六百ヤード、一分競走、暗算競走と進み計算を取り違へて逆戻りを為すあり落第する者ありて笑声場内に満ち巾飛、鰌握り、食競走抔は「運動タイムス」に好材料を与へて千二百ヤードに入り一等原二等松島三等加藤の三氏の優勝に決し是にて午前中の競技を了し午餐と共に余興の相撲あり、吉田、高見、三宅の三氏最も優勢なりし「運動タイムス」は第七号を以て――朝来の黯雲隈なく払はれ委員の愁眉漸く開く競争は番一番と趣味を加へて将に佳境に入らんとし来観の人は刻一刻に襲来して場の内外立錐の余地なきに至る（中略）弱き光線は運動場を照して各中学の選手は今や競争の起点に立ち軒昂たる意気眉宇に溢れ燃ゆるか如き青春の血は心臓に漲り合図の銃は食指を引金に宛てた中原の鹿は誰に帰せんか――との報道を為したり午後よりは然く空も晴れて日光輝き渡り殊に土曜日の事なれは来賓観客は陸続として入場し来り場の内外人垣を造り鎮守の祭より一層の繁昌にて村中の老若を喜悦せしめ午後の第一着手たる中学競争は一回一等明治学院鮑博公二等青山学院伊藤祐作三等日本中学長谷川亀雄三氏同二回は一等正則中学藤山吉雄二等明治学院中里正一郎三等東京中学菅原富司の三氏の優勝と為り夫れより抽籤競走、梨子拾競走、食競走、盲目競走、英語綴競走等あり種種なる矛盾滑稽を演して満場を笑倒せしめ第二回千二百ヤードに入り力闘の結果一等三宅二等平野三等浅川の三氏優勝し次て待ち設けられたる九百ヤード各専門学校選手競走に移り各選手登場するや拍手喝采四方に起り声援頗る盛なり銃声空に響き渉ると共に九名の選手はヒタ走りに駆け出し満場片唾を呑んて其勝負を観るに余念なかりしか最初一高の服部氏頗る優勢なりしか漸く変して遂に一等慶応義塾井手伊吉氏（二分）二等明治大学鈴木正吉氏（二分五秒）三等慈恵医院工藤義雄氏の優勝に帰し次の学員競争には河野会計検査院検査官、小栗同副検査官、東譲三郎、松岡高明氏抔の中老諸君にて僅かに三百ヤードを一周し殆んと半死半生の有様なりしは御苦労の程も察せられ最後の来賓競走は来観の可憐なる児童諸君にして十二人を一隊とし二回の競争あり其優勝者の賞与を受領してニコニコと誇り顔に引き上くるも勇ましかりき是にて円満に全般の競技を了し一同中央大学の万歳を三唱して解散したり当日は奥田学長伊藤理事を始め職員一同終日出場して諸般の指揮をなし優勝者には会長より一一賞品を授与せられ講師学員

諸君の来観も少なからす中野町にて村田氏は入口に緑門を造りて歓迎の厚意を表せられ運動場前には土地有志の素人相撲(ママ)等ありて夜に入るまで頗る賑かなりし